

Computer Report

Vol. 57 No. 3 3月号 (通巻 750号)

はじめの言葉

■事実は小説よりも奇なり、と言われるが、歴史はまさにフィクションを遙かに凌ぐファクト（事実）の連続である。就任後、多くの物議を醸し出しているトランプ米大統領、その言動もさることながら、敢えて現実の歴史的事実（ファクト）を認めようとしただけでなく、恣意的な事実をでっち上げ、もって「オータナティブファクト（もうひとつの事実）」だと言い張る。「もうひとつの事実」とは、言いも言ったりである。

■エアポート（空港）という、文字通りの公衆の面前で行われた暗殺事件も然りである。殺されたのは金正男氏、北朝鮮の金正恩労働党委員長の異母兄である。仕掛けたのは北朝鮮だと断定できる状況証拠で溢れている。つまりは、弟が兄を暗殺したということである。確固たる歴史的事実として後世の世界史に残されていくことだろう。いかに北朝鮮と言えども、ここから「オータナティブファクト」を言い張るには無理があるだろう。

■日本の今国会では、わが国トップである安倍首相夫妻の関与が疑われる事件が追求されている。政治とカネの問題は、古今東西、人類の長い歴史上で出て来ない時はなかったとは言え、あまりにも常にあり過ぎる。大阪の私立学校の用地取得に関連した疑念のようだが、どういうファクトがあったのか明らかにされることを望むばかりだ。それにしても、現職の首相夫妻が連座してのゴシップとは、何ともやり切れない。

■都政の騒動も然りである。豊洲新市場の用地買収に絡んで、都議会で百条委員会が持たれることになった。小池百合子現東京都知事と石原慎太郎元都知事との間でどのようなやり取りがされるかも、東京都民だけでなく、日本国民全体が注目する事態になっている。これも公金が絡む問題であり、政治とカネの問題である。一連の経緯としてどういうファクトがあったのか、真実がつまびらかにされることを期待したい。

■政治とカネの問題というと、建造物建設をめぐるものが定番である。ハコモノと言われる建造物受発注とそれに関わる土地取得に関わるところで表面化してきた。その意味で、東京五輪組織委員会も疑念を持たれやすい要件が整っている。それだけに慎重な対応がされるよう期待したい。五輪組織委員会会長の森喜朗元総理が関係する企業の動静が検証対象になるのはやむを得ない。事実、そうした検証記事がマスコミ報道されている。

■それに対して、森会長は報道した文藝春秋を相手取り、名誉毀損の訴えを起こしている。ここでも真実が求められている。李下の冠の例えではないが、自分の立ち位置を認識し、マスコミ紙誌は何を検証する立場にあるかを理解すべきだろう。むしろ、政治とカネにまみれた自らを隠蔽しようとしているようにすら見える。まさに、李下の冠である。

■歴史家 E エッチカーは「歴史とは歴史家を学ぶことだ」と言い、「何を歴史事実として歴史書に記すかは歴史家の思想＝主観による」と指摘している。どういう事実を事実として認めるかは歴史家だけでなく、われわれ自身も主観によって判断しているに違いない。だからと言って、トランプ流「もうひとつの事実」のような捏造事実論は支持されないだろう。情報社会にふさわしく、事実情報が開示されることを期待したい。（藤見）